

音韻体系の対照と外国語教育

—日本語, タイ語, カンボジア語を例として—

Comparison of phonemic systems for foreign language education

—in the case of Japanese, Thai and Khmer—

峰岸 真琴

Abstract

This study aims to compare the phonemic characteristics of Japanese, Thai, and Cambodian, and implement the results for foreign language education.

First, we compare initial and final consonants, main vowels, and diphthongs in a syllable. After considering the phonemic contrast, we examine the allophones whose occurrence is conditioned by their phonemic environments.

The comparison of initial consonants shows that Japanese plosives have two-way contrast—voiceless /p/ vs. voiced /b/—whereas both Thai and Cambodian have three-way contrast—voiceless non-aspirated /p/ vs. voiceless aspirated /ph/ vs. voiced /b/. Further comparison of allophones shows that Japanese plosives have phonemically conditioned allophones— aspirated [ph] in the syllable initial position and non-aspirated [p] in the intervocalic position. This implies that Japanese native speakers do not phonemically distinguish between the aspirated and non-aspirated plosives. However, they differentiate between the allophones unconsciously, depending on their position in a syllable at the phonetic level. The same holds in the cases of nasal (hatsu-on) and stop (soku-on) in the syllable final position.

Similarly, native Japanese speakers have only one syllable final nasal /N/ and one stop /Q/ at the phonemic level. However, they address the differences among allophonic nasals [m], [n], [ŋ], [ĩ], [ũ] and allophonic stops [p], [t], [c], [k], respectively, at the phonetic level. While hearing and pronouncing, they unconsciously select the appropriate one, depending on its occurrence. Such allophonic differences in language are not consciously recognized by native speakers. However, once they are brought into consciousness by appropriate training to focus on the pronunciation of their native language, allophonic differences would provide significant clues to learn a foreign language effectively.

We call phonemic inventory and description of allophones together as the “phonemic-phonetic profile” of a language, which could be used to predict possible problems that one might encounter while learning a foreign language and might help them to learn the correct pronunciation of the target language soundly.

【キーワード】 対照研究, 日本語, タイ語, カンボジア語, 音韻体系
contrastive analysis, Japanese, Thai, Khmer, phonemic system

1 はじめに

1.1 本稿の目的

本稿の目的は、日本語、タイ語、カンボジア語の三言語を例に、言語固有の音声・音韻上の特徴を相互に比較し、その結果を外国語学習の際にどう活かすかについて検討を試みることである。

比較の具体的な手順としては、主に三言語の分節音素の対立について比較する。出現環境ごとに音声を分析することで、音素の対立に関与する特徴と、対立に関与しない音声的異音とが区別される。次に、音韻レベルおよび音声レベルでの類似点を外国語としての日本語、タイ語、カンボジア語、相互の学習

に役立てる方法について検討を試みる。

なお、本稿では比較言語学 (comparative linguistics) でいう同系統の言語どうしの「比較」と無関係の問題を扱うので、誤解のない限り、対照言語学 (contrastive linguistics) でいう「対照, 対照する」に代えて「比較, 比べる」という日常的な表現法を用いることにする。

1.2 三言語の概要

以下では、日本語、タイ語、カンボジア語について、言語類型上の基本的特徴を挙げ、さらに音声、音韻レベルでの比較を行う際の方法について述べる。

極東に位置する日本語に対して、タイ語とカンボジア語 (クメール語とも呼ばれる) はともに東南アジア大陸部に位置する。系統上、日本語は近縁に同系統の言語を持たないが、タイ語はタイ・カダイ諸語に、カンボジア語はオーストロアジア語族の一部であるモン・クメール語族に属する。

古典的な形態類型論では、日本語は膠着語に、タイ語とカンボジア語は孤立語に分類される。音韻の面では、タイ語が声調言語であるのに対し、カンボジア語には声調はない。文法的特徴を見ると、主語 (S=Subject), 目的語 (O=Object), 動詞 (V=Verb) からなる文の基本語順は、日本語が SOV 語順、タイ語とカンボジア語は SVO 語順である。語形成上の音韻的特徴として、日本語は多音節的であるのに対し、タイ語とカンボジア語は単音節あるいは二音節を基調とする。このように、日本語と比べる限り、タイ語とカンボジア語には共通点が多い。両言語は歴史的にも関係が深く、ともにインド系文字を用いる。またタイ語とカンボジア語は相互に語彙を借用する関係でもある。

1.3 音韻の比較のための基本的な概念

言語学における言語形式の記述とは、ある環境 (記述レベル) において出現する要素を数え上げ、要素どうしおよび要素とその出現環境との関係を分析することである。音声、音韻、形態、統語、意味といった言語のそれぞれのレベルにおいて、同様の方法が記述研究の基礎となる。

本稿では、この記述法を音声と音韻のレベルに適用する。まず具体的な音声レベル (音の物理的あるいは生理的環境と見なされよう) では、ある言語の発話で用いられる具体的な音 (オン) について、その出現環境を考慮しつつ調音方法を観察し、記述する。観察された音声は角カッコ [] に挟んで示す。

以下の比較を行うための前提として、本稿の音声、音韻の基本的な概念の考え方を述べておく。具体的な発話の一つ以上の句からなり、句は音節 (syllable) の連続と見なすことができる。音韻レベル (聴覚、認知的環境) では、音声レベルで観察された音の音声物理的および発音生理的な違いが、語や発話の意義の違いを表すことに関与するかどうかという「認知的な対立」の観点から分析と解釈を行い、言語形式の意味の弁別に関与する抽象的な音韻レベルの単位である音素 (phoneme) を抽出する。抽出された音素は原則として本文中では斜線 / / に挟んで示すが、表の中では煩雑を避け、/ / を省略する。

このようにして音節を構成する要素として抽出された母音 (Vowel, V で示す, 以下同様), 子音 (Consonant =C), 半母音 (semivowel) は分節音素 (segmentals) と呼ばれる。一方、音声のピッチや発声上の特徴が一つの音節全体、あるいは複数の音節にかぶさるものを超分節的特徴 (suprasegmental features) と呼び、そのうち意味の弁別に関わる要素を超分節素 (suprasegmentals) と呼ぶ。超分節素のうち、アクセントは複数の音節にまたがり、主として語句のまとまりあるいは境界を示す機能を持つが、日本語アクセントのように語彙的な意味の弁別に寄与することもある。声調は一つの音節にかぶさり、語彙的な

意味の弁別機能を持つ。本稿ではアクセントと声調の比較を扱うことはしない¹。また、タイ語とカンボジア語の固有の二音節語は強勢のない第一音節（副音節）と強勢を持つ第二音節（主音節）とからなり、両者は音節構造上も異なるが、本稿では主音節だけを扱うことにする。

本稿の考察では、比較対象の三言語の音節が、子音 C、母音 V の構成する音節構造 C₁(C₂)V(C₃) から構成されると考える。ここで丸カッコ () はカッコ内の要素が選択的であることを示す。以下では、三言語の音節初頭子音 C₁、子音連続 C₁-C₂、音節末子音 C₃、母音 V をそれぞれ比較する。

2 子音体系の比較

2.1 音節初頭の子音音素

以下の音韻目録 (phonemic inventory) の作成には、日本語については日本語学会(編)(2018)、上野(編)(2003)、亀井 他(編著)(1995)、服部(1969)、(1979)を参照した。タイ語については亀井 他(編著)(1989)の「タイ語」(三谷恭之執筆)を、カンボジア語については亀井 他(編著)(1988)の「クメール語」(坂本恭章執筆、方言のみ峰岸真琴執筆)の項目を参照した。ただし三言語相互の比較を見やすくするため、参照文献のもともとの音韻解釈を損なわない範囲で、調音法に関する用語や、半母音/w, v/, /y, j/などの音素表記を一部改変した。

2.1.1 日本語の音節初頭子音

表 1-1 に、日本語（以下では、共通語を指す）の音節初頭に現れる子音音素を挙げる。以下の表では、音素以外の音声的実現形を、異音も含めて [] で囲んで示す。子音は音節 C₁(C₂)V(C₃) のいずれかの C の位置を占める。日本語の音素の解釈は、研究者により見解の異なる部分がある。

表 1-1 日本語の音節初頭子音音素とその音声的実現形

調音法\位置	唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門(喉)
無声破裂音	p [ph, p]	t [th, t, tʃ, ts]	(c)	k [kh, k]	
有声破裂音	b	d		g [g, ŋ, ɣ]	(ʻ)
鼻音	m	n		(ŋ)	
無声摩擦音		s [s, ʃ]			h [h, ç, φ]
有声摩擦音		z [z, dʒ, dz]			
半母音	w [w]	y [j]			
流音		r [ɹ, r, l, d]			

本稿では解釈の相違について諸説の詳細を検討することはできない。諸説が対立する主な論点は、四つ仮名(じ・ぢ、ず・づ)の混同などの史的音韻変化に由来するものや、外来語使用に由来する異音の流入によるもの、あるいは /h-b, s-z, t-d, k-g/ の「清濁」の音韻対立に関わる音声的実現形のうち、どれとどれを対立項とみなすかという解釈の異同によるものである²。

¹ 本稿の音声学、音韻論、日本語の音韻の概念については、参考文献のうち、主として日本語学会(編)(2018)の以下の項目に従った。各項目の記述内容には執筆者による相違があるため、丸かっこ内に当該項目の執筆者を示す。「アクセント」(木部暢子)、「アクセント理論」(窪園晴夫)、「音韻」(相澤正夫)、「音韻論」(松森晶子)、「音声学」(前川喜久雄)、「音節」(音素配列論)(高山知明)、「声調」(遠藤光暁)。

² この他に、服部(1960)、(1979)は、表内の丸かっこで示した硬口蓋音素 /c/ と、音声的にはゼロとして実現する抽象的な喉音音素 /ʻ/ を立てるが、これらは音韻の体系性を重視する服部が音素認定のために提案した一連の「作業原則」

本考察の上で注意すべきことは、現実の音声として実現しているのは、音素的な対立だけではない点である。音声上の相違が認知上の対立として意識されるかどうかは、個々の音素の音声特徴だけでなく、その出現環境にも依存する。例えば日本語の破裂音 /p, t, k/ は、音節初頭では弱い気音を伴う有気音 [ph, th, kh] だが、母音間や促音「っ」、撥音「ン」の後では、ほとんど気音を伴わない [p, t, k] である。このことは日本語母語話者が発音あるいは聞き取りの際に、破裂音の気音の有無を音韻レベルでは無視する一方で、その音声上の違いを無意識に知覚し、使い分けていることを示している。

2.1.2 タイ語の音節初頭子音

表 1-2 に標準タイ語の音節初頭に現れる子音音素と、その主な音声的实现形を挙げる。

表 1-2 タイ語の音節初頭子音音素とその音声的实现形

調音法\位置	唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
無声無気破裂音	p	t	c [tʰ]	k	ʔ
無声有気破裂音	ph	th	ch [tʰ, ʃ]	kh	
有声破裂音	b	d			
鼻音	m	n		ŋ	
摩擦音	f	s			h
半母音	v [w]	j [j, j̥]			
流音		(r)l			

タイ語固有の文字の書記体系から見て、/ch/ は本来破裂音（実際は摩擦音[tʰ]として実現）であるが、異音として摩擦音 [ʃ] も現れる。半母音 /j/ は接近音であるが、[ji:] のように狭い母音の前では摩擦性が強まる。声門閉鎖音 [ʔ] は、語をはっきり丁寧に発音する場合に現れるが、日常の発音では音節初頭位置に現れない。日常の発音では /r/ は /l/ に合流し、ほぼ失われているが、ニュースのアナウンサーなどの改まった発音では、[r] が意識的に発音される。

表 1-1 と比べると、破裂音の音素対立について、日本語では /p-b/, /t-d/, /k-g/ という無声対有声の二項対立が認められるのに対し、タイ語では /p-ph-b/, /t-th-d/ に「無声無気」対「無声有気」対「有声」という三項対立が認められる。ただし、/k-kh/ は「無声無気」対「無声有気」の二項対立であり、/g/ が「あきま」である。

2.1.3 カンボジア語の音節初頭子音

表 1-3 に、標準カンボジア語の音節初頭に現れる子音音素と、その主な音声的实现形を挙げる。/b/, /d/ はそれぞれ入破音 (implosive) [ɓ], [ɗ]として実現する。/f/ は外来語にのみ現れる。

表の「無声有気破裂音」は、坂本・峰岸 (1988) は音素として挙げていないが、これはカンボジア語の無声有気破裂音を、それぞれ無声無気破裂音 /p, t, c, k/ と気音/h/ が連続した子音連続 /p-h, t-h, c-h, k-h/ と解釈しているためである。音声的にはタイ語の無声有気破裂音と違いはないのに音韻解釈が異なるのは、カンボジア語では無声有気破裂音の破裂音と気音の間に接中辞 (infix) が入ることがあるためである。

に従ったためである。このような唇部の子音解釈に関する批判の例としては、橋本 (1977) を参照のこと。

表 1-3 カンボジア語の音節初頭子音音素とその音声的実現形

調音法\位置	唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
無声無気破裂音	p	t	c [tʃ]	k	ʔ
【無声有気破裂音】	ph	th	ch [tʃʰ]	kh	
有声破裂音	b [β]	d [d]			
鼻音	m	n	ɲ	ŋ	
摩擦音	(f)	s			h
半母音	v [w, ʋ]	j [j, j]			
流音		r, l			

/p-ph-b/, /t-th-d/ に「無声無気」対「無声有気」対「有声」という三項対立が認められ、かつ /k-kh/ が「無声無気」対「無声有気」の二項対立である点も含め、カンボジア語とタイ語の音節初頭子音の対立は極めてよく似ている。主な相違点は、カンボジア語では硬口蓋鼻音 /ɲ/ が音節初頭に現れる点である。

2.2 音節初頭の子音連続

以下では、音節初頭の子音連続 (consonant cluster) を C_1 - C_2 と表すことにする。

日本語の拗音は、音節初頭子音 C_1 の /k, g, s, z, t, n, h, p, m, r/ に、 C_2 として /y/ が連続した子音連続と解釈する。

タイ語では、無声破裂音 C_1 /p, ph, t, th, k, kh/ に C_2 として /l, r, v/ のいずれか一つが連続した /p-r, p-l, ph-r, ph-l, t-r, (th-r), k-r, kh-r, k-l, kh-l, k-v, kh-v/ の 12 種の子音連続が可能である。ただし、/thr/ はサンクリットからの外来語のみに現れる例外的なものである。

カンボジア語では、82 種類の子音連続が可能である。 C_1 には /p, t, c, k, s, ʔ, m, l/ が、 C_2 には /p, t, c, k, ʔ, b, d, m, n, ɲ, v, j, l, r, s, h/ のいずれかが現れる。既に述べたように、カンボジア語の無声有気破裂音 /kh, ch, th, ph/ は、それぞれ C_1 を /k, c, t, p/ とし、 C_2 を /h/ とする子音連続と見なされるため、これらも 82 種の子音連続に含まれている³。

以上のように、タイ語とカンボジア語は類似の子音音素目録を持っているが、音素の配列法の違いによって、子音連続の組合せが大きく異なっている。

2.3 音節末の子音

表 2 に、日本語、タイ語、カンボジア語の音節末に現れる子音音素と、その主な音声的実現形 (異音も含める) を挙げる。

日本語では、いわゆる促音 (/Q/ で示す) と撥音 (/N/ で示す) の 2 種の子音音素だけが音節末子音として現れる。

³ カンボジアの民族名クメール (Khmer) も語頭に音節初頭音素の連続 /k-m/ を持つが、音声的には [khmae] のように、有気音 [kh] と [m] として実現する。しかし、この子音連続においては、/k-m/ の間の気音 [h] は /k/ と /m/ の間に機械的に生じ、これに対立する [km] という組合せは (綴り字上以外には) 存在しない。つまりカンボジア語では、 C_1 と C_2 の組合せに従って /km/ [khm], /ks/ [khs], /kr/ [kr], /khl/ [khl] のように、 C_1 と C_2 の間に気音が生じるかどうか自動的に決まるため、この位置に生じる気音は語の意味の対立に関与せず、従って独立した子音音素 /h/ とは見なされない。

表2 三言語の音節末の子音音素とその音声的实现形

言語\調音法	閉鎖音	鼻音	左記以外
日本語	Q [p, t, c, k, s, ʃ]	N [m, n, ɲ, ŋ, ĩ, ũ]	なし
タイ語	p [p ^ʔ], t [t ^ʔ], k [k ^ʔ], ʔ	m, n, ŋ	v [ɰ], j [j̃]
カンボジア語	p [p ^ʔ], t [t ^ʔ], c [c ^ʔ], k [k ^ʔ], ʔ	m, n, ɲ, ŋ	v [ɰ, ɰ], j [j̃], l, h

音素 /Q/ あるいは /N/ がどのような異音として実現するかは、後続音への逆行同化により、後続する音節の子音あるいは母音によって決定される。日本語母語話者であれば、/Q/ あるいは /N/ の出現環境による調音位置と調音法の違いを音韻知覚のレベルでは無視するように習慣づけられている一方で、発音の際には音声レベルの違いを無意識に使い分けている。

タイ語では音節末に破裂音（閉鎖の後の破裂的開放を伴わない内破音）、鼻音、半母音が現れる。カンボジア語では、タイ語の末子音に加えて、/c/, /ɲ/, /l/, /h/ も末子音として現れるという特徴がある。ただしタイ語の末子音 /v/ は、音節副音的な円唇半母音 [ɰ] として実現する。一方カンボジア語の末子音 /v/ は、音節副音的な非円唇半母音 [ɰ̃] または円唇半母音 [ɰ] として実現するが、両者の出現は先行する主母音によって条件付けられている。

日本語に比べてタイ語およびカンボジア語の末子音は多様であるが、三言語ともに、音節末の子音は1つしか出現しないという共通点がある。また音声的实现形に関しては、[p, t, c, k, m, n, ɲ, ŋ] を共有する点で、三言語は互いに似ていることに注意すべきである。

3 母音体系の比較

3.1 日本語の母音

表3-1に日本語の母音音素を挙げる。本稿では日本語の長母音、二重母音を短母音音素の連続したものと解釈し、短母音音素だけを示している⁴。

/u/ は語頭では弱い円唇化を伴うが、それ以外の位置では非円唇母音として実現する。このことは、「クルクル（回る）」のように「クル」を繰り返すと、[khurukuru] のように、最初の「ク」だけに弱い円唇化があることから確認できる。

表3-1 日本語の母音音素

開き\舌位置	前舌	中舌	後舌
狭母音	i		u [ɰ]
半狭母音	e		o
広母音		a	

なお、共通語の狭母音 /i/, /u/ は、「危機」/kiki/ 「九九」/kuku/ のような無声子音の間では [ĩ], [ũ] のように無声化する。

⁴ 子音の場合と同様、日本語の母音体系については複数の解釈が存在している。本稿ではその詳細を検討することはできないが、長母音、二重母音の解釈が論点になる。例えば日本語学会（編）（2018）「音韻」（相澤正夫執筆）は、短母音音素だけを挙げている。亀井 他（編著）（1989）「現代日本語 音韻」（上村幸雄執筆）は短母音音素と独立した長母音音素を認める立場である。諸説の概要とそれぞれの問題点については、城生（1977）を参照のこと。

3.2 タイ語の母音

表 3-2 に、タイ語の長短の母音音素を挙げる。この他にタイ語には 3 種の下り二重母音があるが、二重母音については別にまとめて述べることにする。これら三種の母音は音節 $C_1(C_2)V(C_3)$ のうち、音節主音 V の位置を占める。

表 3-2 タイ語の母音音素

開き\舌位置	長母音			短母音		
	前舌	中舌	後舌	前舌	中舌	後舌
狭母音	ii	uuu	uu	i	u	u
半狭母音	ee	əə	oo	e	ə	o
広母音	ɛɛ	aa	ɔɔ	ɛ	a	ɔ

タイ語の母音には、日本語と同様、長短の対立がある。短母音 /i/ を例にとると、/i/ と対立する長母音を /i:/ を二つ並べて /ii/ で表記しているが、これは表記上の便宜的なものにすぎず、/i:/ のように表しても構わない。タイ語やカンボジア語では、短母音と長母音の対立には、持続時間だけでなく、出現環境の違いが重要な役割を果たしている。長母音が開音節にも閉音節にも現れうるのに対して、短母音は閉音節 -VC にしか現れない。言い換えれば、仮に物理的な持続時間が短くても、音節末に子音が現れない限り、音韻的には短母音とは見なされない。また、中舌狭母音音素の位置にある /uuu/, /u/ は、厳密には後舌の非円唇母音 [u:], [u] として発音される⁵。

29

3.3 カンボジア語の母音

表 3-3 に、標準カンボジア語の長短の母音音素を挙げる⁶。別に 3.5 節、3.6 節で述べる二重母音を除き、長短の母音音素の対立を見るかぎりでは、タイ語とカンボジア語の音素体系は同じ対立を持つと考えて良い。

表 3-3 カンボジア語の母音音素

開き\舌位置	長母音			短母音		
	前舌	中舌	後舌	前舌	中舌	後舌
狭母音	ii	uuu	uu	i	u	u
半狭母音	ee	əə	oo	e	ə	o
広母音	ɛɛ	aa	ɔɔ	ɛ	a	ɔ

タイ語と同様に、カンボジア語の短母音も閉音節にしか出現しない。カンボジア語の短母音には、後

⁵ タイ国内の近年の音韻表記では、IPA の円唇中舌母音を表す [u] を用いて /uuu/, /u/ をそれぞれ /uuu/, /u/ と表記するのが一般化しているようであるが、実際の発音は非円唇母音である。

⁶ この表に挙げる解釈は、タイ語と比較する都合上、坂本 (1969) の「標準カンボジア語」のもので、「頭声」(head register) 対「胸声」(chest register) という発声法 (phonation type) の対立を前提とする解釈である。現在はレジスターの対立が消失した結果、母音どうしの合流による母音体系の複雑化、あるいは一部母音の二重母音化による母音体系の単純化が生じ、各地の方言的差異を生み出している。詳細については峰岸 (1985)、坂本・峰岸 (1988) を参照のこと。

続する音節末子音に厳しい共起制約が見られるものがある。例えば /i/ は /ih, iʔ/, /e/ は, /ep, et, ec, eʔ, ep/, /ɛ/ は, /ɛh/ という組合せでしか出現しない。一方, /a/ は全ての末子音と共起することができる。タイ語と同様に, 中舌狭母音音素の位置にある /uuw/, /u/ は, 厳密には後舌の非円唇母音 [u:], [u] として発音される。既に子音について見たのと同様に, タイ語とカンボジア語は母音についても類似の音素目録を持っている。

3.4 日本語の連母音

日本語は5つの母音の2つの組合せの制限が緩やかである。5つの母音同士の組合せは理論的には20通り可能であるが, これらのうち, 綴り字上の「エイ」は [e:] のように, 「オウ」は [o:] のように長母音として発音されるのが一般的である。

3.5 タイ語の二重母音

タイ語には本来の二重母音が /ia/, /ua/, /ua/ の三種類ある。これらは全て起点となる母音 /i/, /u/, /u/ が主母音で, 終点の /a/ が副母音の下り二重母音である。三種とも [a] を終着点とする積極的な移動ではなく, 狭母音が緩んで中舌半狭母音 [ə] へと近づく点に調音上の特徴がある。それぞれ [i:ə], [u:ə], [u:ə] のように発音されるため, 音声的実現形を重視して, /iə/, /uə/, /uə/ と表記されることもある。

長短の母音と同様に, 二重母音は音節 C₁(C₂)V(C₃) のうち, 音節主音である V の位置を占める。二重母音に加えて, タイ語では長短の母音 V に C₃ として半母音 /v/ [u] または /j/ [i] が後続する場合, 音声的には二重母音あるいは三重母音として実現する韻母 (rhyme あるいは coda) がある。これらは音節構造上は閉音節 VC₃ であるが, タイの発音・音声表記には C₃ を母音記号 [u] あるいは [i] を用いて表すものもあるため, 本稿では便宜上, これらを「見かけの二重母音, 三重母音」と呼ぶことにする。

表4-1はタイ語の真正の二重母音に加え, 単純短母音・長母音あるいは二重母音に音節末子音が後続する「見かけの二重母音, 三重母音」とを併せて示すものである。見かけの二重母音あるいは三重母音を丸カッコ内に示す。

表4-1 タイ語の二重母音と「見かけの二重母音, 三重母音」

開き\舌位置	長母音			短母音		
	前舌	中舌	後舌	前舌	中舌	後舌
狭母音	ia, (iav)	ua, (uaj)	ua, (uaj)	(iv)		(uj)
半狭母音	(eev)	(əəj)	(ooj)	(ev)		
広母音	(εεv)	(aav), (aaj)	(əəj)	(εv)	(av), (aj)	(əj)

タイ語の「見かけの二重母音」は前舌母音から後舌に向かう /iv/, /ev/, /ev/, /eev/, /εεv/, 後舌母音から前舌に向かう /uj/, /əj/, /ooj/, /əəj/, 中舌母音から後舌に向かう /av/, /aav/, 中舌母音から前舌に向かう /əəj/, /aj/, /aaj/ がある。「見かけの三重母音」には /iav/, /uaj/, /uaj/ がある。表4-1, 表4-2では末子音が /v/ のものを青字で, /j/ のものを赤字で示してある。

本来の二重母音と「見かけの二重母音, 三重母音」の区別は, これらの後に音節末子音が来られるかどうかを決めるために重要である。例えば, 二重母音 /ia/ で終わる語は, /ia/ が音節の主母音の位置を

占めるが、音節末子音のない開音節である。従って、/iak/, /iaŋ/, /iap/, /iam/ などのように、/ia/ の後に音節末子音の一つ後続できる。一方、「見かけの二重母音」、例えば /uj/[u] の場合は、短母音 /u/ の後の末子音の位置を /j/[i] が占めている。タイ語は日本語、カンボジア語と同様、音節末子音 C₃ を一つしか許さないの、[oj] の後に、さらに音節末子音を後続させることはできない。このことは、タイ語母語話者が英語の oil [oi-l] などの二重母音の後の末子音 [l] を発音したり、聞き取る際に負の干渉を受ける可能性を示している。これについては、外国語学習上の負の干渉に関する第 5.2 節以下で改めて述べることにする。

3.6 カンボジア語の二重母音

表 4-2 はカンボジア語の真正の二重母音に加え、単純短母音・長母音あるいは二重母音に音節末子音が後続する「見かけの二重母音、三重母音」を丸カッコ内に示すものである。

表 4-2 カンボジア語の二重母音と「見かけの二重母音、三重母音」

開き\舌位置	長母音			短母音		
	前舌	中舌	後舌	前舌	中舌	後舌
狭母音	iə, (iəv) (iiv)	uə, (uəj) (uuuj)	uə, (uəj) (uuuj)	(iv)		(uj)
半狭母音	(eev)	(əj), ea, (eav) (eaj)	(ooj)	(ev) (ej)	(əv), (əj)	(oj), (ov)
広母音	ae, (aev)	aə, ao, (aəj), (aoj) (aav), (aaj)	ɔa, (ɔaj)	ɛa	(av), (aj)	

カンボジア語には本来の二重母音が /iə/, /uə/, /uə/, /ae/, /aə/, /ao/, /ea/ /ɛa/, /ɔa/ の九種類ある。これらのうち、/ea/, /ɔa/ は終点となる母音/a/ が主母音の上り二重母音であり、それ以外はそれぞれ起点となる母音 /i/, /u/, /u/, /a/, /e/ が主母音の下り二重母音である⁷。

カンボジア語の見かけの二重母音は /iv/, /ev/, /əv/, /av/, /ov/, /ej/, /əj/, /aj/, /uj/, /oj/, /iiv/, /eev/, /aav/, /uuuj/, /əəj/, /aaj/, /uuuj/, /ooj/, /ɔaj/ がある。「見かけの三重母音」は、/iəv/, /aev/, /eav/, /uəj/, /eaj/, /aəj/, /aoj/, /uəj/ がある。

3.7 タイ語、カンボジア語の二重母音の方向性

以下では二重母音について、その起点から終点に向かう方向を概念的に示した図をもとに、タイ語とカンボジア語の比較を試みる。

図 1-1 はタイ語の三種の二重母音 /ia/, /ua/, /ua/ である。三種とも、狭母音から中舌半狭母音 /ə/ (さらには広母音 /a/) の方向に移動している。

⁷ /uə/ はタイ語からの借用語のみで見られるため、この二重母音自体がタイ語からの借用によるものと考えられている。また本表の 後舌の下り二重母音 /uə/ を坂本は /uo/ と解釈しているが、/o/ の円唇性は積極的な調音努力によるものではなく、主音の /u/ の円唇性が後続する /ə/ にまで及んだものと解釈される。

図1-2はタイ語の「見かけの二重母音」(長短の母音音素から半母音 /j/[i] あるいは /v/[u] の方向に向かう母音)である。タイ語では、起点が前舌母音 /i/, /e, ee/, /ε, εε/ であれば、終点は後舌の /v/ であり、起点が後舌母音 /u/, /o, oo/, /ɔ, ɔɔ/ あるいは(例外的に)中舌母音 /ə/ であれば、終点は前舌の /j/ である。起点が中舌母音(非前舌かつ非後舌母音) /a/ であれば、終点は /v/ あるいは /j/ のいずれかである。図1-2, 図2-2では末子音が /v/ のものを青の矢印で、/j/ のものを赤の矢印で示してある。

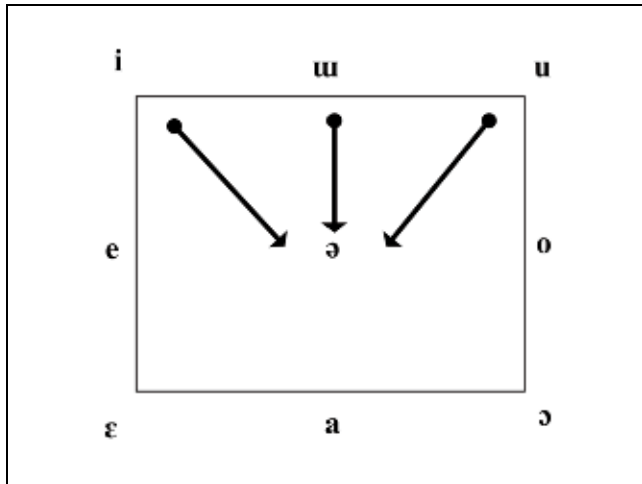


図1-1 タイ語の二重母音の起点と終点

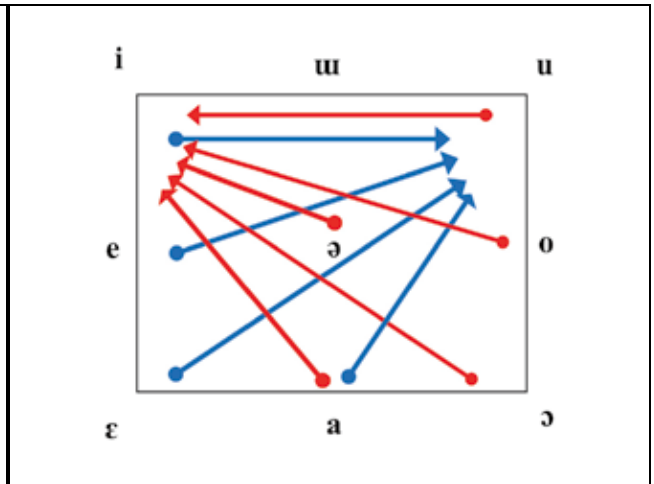


図1-2 タイ語の見かけの二重母音の起点と終点

図2-1はカンボジア語の二重母音である。起点が狭母音の三種 /ia/, /ua/, /ua/ があるのはタイ語と同様だが、この他に、前舌広母音 /ε/ を起点とし、/a/ に向かう /εa/, 後舌母音 /ɔ/ を起点とし、/a/ に向かう /ɔa/, さらに中舌母音 /a/ を起点とし、半狭母音 /e/, /ə/, /o/ に向かう三種の母音 /ae/, /ae/, /ao/ と、計八種の二重母音がある。二重母音のうち、タイ語と共通するものを黒の矢印で、カンボジア語独自のものを緑の矢印で示す。

図2-2はカンボジア語の「見かけの二重母音」である⁸。

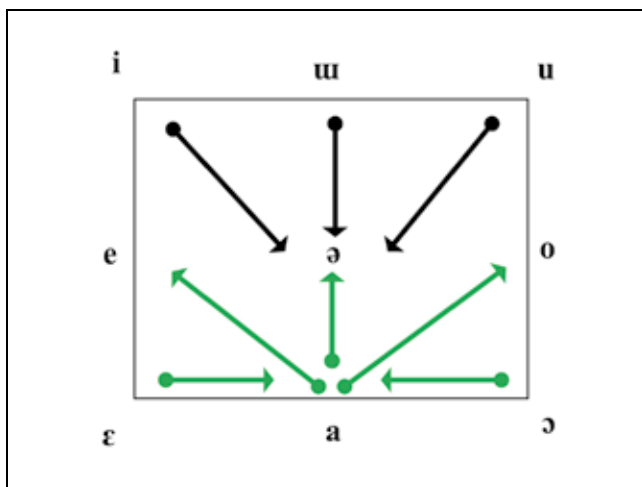


図2-1 カンボジア語の二重母音の起点と終点

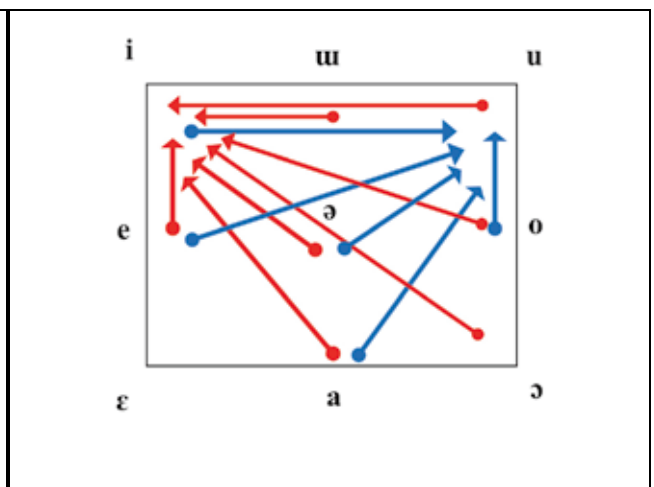


図2-2 カンボジア語の見かけの二重母音の起点と終点

⁸ カンボジア語の見かけの二重母音 /av/, /aav/ などの音節末子音(半母音)は、円唇の [u] としてではなく、非円唇の [ɯ] として実現する。この結果、二重母音/aə/ [aə], /ao/ [ao] と /av/ [aɯ] は互いに音声的に異なり、音韻的にも対立する。

タイ語では起点が前舌母音であれば終点は後舌であり、起点が後舌母音であれば、終点は前舌であるという特徴があるが、カンボジア語では前舌母音から前舌に向かう /ej/ および後舌母音から後舌に向かう /ov/ がある点で、多様な二重母音があることが特徴である。カンボジア語には前舌母音から後舌に向かう /iv/, /iiv/, /ev/, /eev/, 後舌母音から前舌に向かう /uj/, /uuj/, /oj/, /ooj/, /ɔj/, 中舌母音から前舌に向かう /əj/, /aj/, /aaj/, 中舌母音から後舌に向かう /əv/, /av/, /aav/ がある。これらタイ語と類似したもの他、カンボジア語の特徴として、前舌間の半狭から狭母音への /ej/ および後舌間の半狭から狭母音への短い移動である /ov/ があること、中舌狭母音から前舌に向かう /uuuj/ や、中舌半狭母音から前舌あるいは後舌に向かう /əj/, /əv/ といった多様な二重母音が存在することが挙げられる。

このような音素配列上の共起制限の違いは、日本語母語話者がタイ語あるいはカンボジア語を外国語として学習する際の難易度の違いに関連する。特に、中舌母音 /ə/ を含む /əj/ と /aj/, /əv/ と /ov/, /av/, /ao/ などの対立の学習には注意を要するものと思われる。参考までに、坂本 (2001) による最小対立の例に音声表記を加えて以下に挙げておく。

/dəj/ [dəj] (大地) : /daj/ [daj] (手) : /daə/ [daə] (歩く) : /dav/ [dav] (指す) : /dao/ [dao] (腫れる) ;
 /taə/ [taə] (疑問標識) : /təv/ [təv] (行く) : /tav/ [tav] (斗, 箒) : /tao/ [tao] (背を丸める) ;
 /cav/ [cav] (孫, 主人) /cao/ [cao] (泥棒) ;
 /baə/ [baə] (接続詞「もし」) : /bav/ [bav] (乳を飲む) : /bao/ [bao] (反る, ゆがむ) ;
 /plov/ [plov] (道) : 対 /pləv/ [pləv] (腿)

3.8 超分節的特徴の比較

本稿では超分節的特徴 (suprasegmental features) の比較について、その詳細を述べることはできない。超分節的特徴とは、音節を超えた発話句あるいは一つの発話にまたがって現れ、音韻上あるいは韻律上の機能を持つ特徴で、音声の高低または強勢の強弱として実現するが、母音の長短の対立とも関わる。

超分節的特徴のうち、一つ以上の明確な型として区別可能なものを超分節素と呼ぶ。日本語では語より大きな文節 (発話句) にかかる音のピッチの変化が、超分節素である高低アクセントを表す。一つ以上の句の連続にかかる音調 (intonation) は、疑問、驚き等の意味を表す超分節特徴である。文の音調は、上昇、下降などのおよその形を持つが、明確な型として対立しているとまでは言えない。

本稿では詳細を検討することができないが、日本語のアクセントの機能として重要なのは、句のまとまりを示す境界指示機能であって、語の弁別は副次的なものである。一方、タイ語の五つの声調は音節ごとに定まっていて、その機能は語彙的弁別機能であるという相違がある。従って、日本語のアクセントの聞き取りは、声調言語の話し手であっても困難であると予想される。タイ語およびカンボジア語の二音節からなる固有語は常に主音節である第二音節に強勢アクセントがある「弱+強」のパターンを持つ固定アクセントである。タイ語のような声調言語でも、強勢アクセントの型が「語」の境界を示す機能を果たしていることに注意すべきである。

4 音韻比較のまとめ

以上、三言語の音節構造を $C_1(C_2)V(C_3)$ と見なし、音節を構成する要素である C_1, C_2, C_3, V のそれぞれについて、音素目録に従って相互の比較を行った。ここで三言語を比較した結果の要点と、外国語教育への応用の可能性を検討する上で、特に留意しておくべき点を挙げる。

- (1) 音節初頭子音のうち、破裂音の音韻対立は、日本語が無声対有声の二項対立であるのに対し、タイ語およびカンボジア語はともに「無声無気」対「無声有気」対「有声」の三項対立である。
- (2) 現実の音声として現れているのは音素的な対立だけではなく、音韻的には余剰的と見なされる異音や音声的特徴もまた実現している。既に述べたように、日本語母語話者が発音あるいは聞き取りの際に、出現環境による破裂音の気音の有無について、音韻レベルでは無視するように習慣づけられている一方で、その音声上の違いを無意識に知覚し、使い分けしていることに注意すべきである。
- (3) 子音連続 C_1-C_2 については、日本語では /y/ だけが C_2 として現れうる。これに対し、タイ語は /l, r, v/ 3種のいずれか一つを C_2 とする 12種類の子音連続が可能である。さらにカンボジア語では /p, t, c, k, ʔ, b, d, m, n, ɲ, ŋ, v, j, l, r, s, h/ のいずれか一つを C_2 とする、82種類の子音連続が可能である。
- (4) 音節末子音としては、日本語では促音 /Q/、撥音 /N/ の2種類の音素があり、それぞれ後続音節の初頭子音あるいは母音に従って、同器官的な調音位置を持つ破裂音あるいは鼻音として音声的に実現する。タイ語では /p, t, c, k, ʔ, v, j, m, n, ŋ/ の九つの子音が、カンボジア語では /p, t, c, k, ʔ, v, j, l, h, m, n, ɲ, ŋ/ の13の子音が音節末子音として現れうる。なお三言語ともに、一つの音節に音節末子音を一つまでしか許容しない点は、重要な共通点である。
- (5) 音節主音である母音については、日本語が五つの短母音を持つのに対し、タイ語およびカンボジア語の長短の母音は九つの対立を基本としている。母音の長短は音韻的な対立によるもので、物理的、音響的な音波の持続時間とは必ずしも一致しない。日本語の母音の長短は音節の構造によるモーラの違いとして解釈できるが、タイ語、カンボジア語では、音節末子音の有無が母音の長短を決めるための重要な手がかりとなっている。
- (6) 日本語と比べると、タイ語とカンボジア語の音素目録は互いに類似しているが、音素の数を見ると、子音連続および二重母音について、カンボジア語がより多くの対立を持っていることが分かる。本稿では詳細を述べることはできないが、このことは語を構成する音節数、アクセントあるいは声調の有無と相関すると考えられる。すなわち、語を弁別する際に、日本語は一音節を構成する初頭子音、母音、末子音それぞれの音素の対立数が少ないが、それを補うかのように複音節語を基調としている。一方、単音節または二音節を基調とするタイ語、カンボジア語は、一音節当たりの音素の対立数が多い。タイ語は声調言語であるため、一音節当たりの語の対立に多様なパターンがある。カンボジア語には多様な子音連続と二重母音があるため、一音節当たりの語の対立に多様なパターンがあると考えられる。

5 三言語の音韻の比較とその応用について

本稿では主に音素目録について三言語の比較を試みた。比較の結果を外国語教育（日本語母語話者のタイ語・カンボジア語学習およびタイ語・カンボジア語母語話者の日本語学習の双方向）に活かす方法を検討する前提として、以下では音韻の比較方法について要点をまとめておく。

本稿では $C_1(C_2)V(C_3)$ という音節構造が三言語に共通するものと仮定した上で、まず子音音素、母音音素についてそれぞれ比較し、次に $V(C_3)$ という韻母の音素配列のレベルで比較するという方法をとった。

音素目録はそもそも他言語との対照を目的にしたものではなく、単一の言語について音韻の対立に必須の要素のみを音素として抽象したものである。本稿では音素目録を比べると同時に、音素の認定段階で捨象される、余剰的な音声特徴や異音についても比較した。後者は音韻対立に関与しない余剰的なも

のとはいえ、特定言語の分析の過程で得られた具体的な音声情報を含んでおり、またその言語の音声らしさを表す特徴でもある。

5.1 音節の重要性に関する仮説

本稿の音韻習得に関する仮説および外国語学習への応用に関する仮説を以下に述べる。とはいえ、言語獲得や外国語学習に限らず、学習・教育の研究は人間の知性の発達を総合的に扱うものであって、言語学一般だけでなく、語学教育、教育学、心理学、認知科学など多くの専門分野の知見を動員して解明すべきものである。言語学者は文法書も辞書もない言語に関する「学習の専門家」としての訓練・経験は積んでいるので、本稿の見解は、そのような立場からの仮説であることをご了解いただきたい。

本稿で音節を三言語を比較する拠り所としたのは、音節こそが音声・音韻の獲得・習得および実際の調音・聞き取りの単位であると、筆者が考えるためである。音節の構造は、日常の言語の獲得だけでなく、押韻や拍の数え方の基本単位として、伝統的な歌謡や定形詩などの言語芸術の韻律の基礎となっている点でも重要である⁹。

子どもが母語の音韻を獲得する過程とは、連続的な音声を音節へと分節して認識し、音節の構成要素である音素、超分節素相互の対立関係を獲得する過程である。音韻獲得の過程は、意味の弁別に関わる関与的 (pertinent) 特徴を捉える一方で、非関与的音声特徴を無視するという、いわば音韻の「色眼鏡」を獲得する過程であるとも言えよう。言語学で音素目録を作成する作業は、この「母語の色眼鏡」を記述することに相当する。

「母語の色眼鏡」は、母語の発音と聞き取りに必須のものである。一方でこの「色眼鏡」は、母語の音韻体系に当てはまらない音声を無視するように働くため、外国語の聞き取り、発音に対する障壁として機能する。

これは未検証の仮説に過ぎないのだが、我々がある音声を聞き取る際には、聴覚機能と結びついた認知機能だけを働かせているわけではなく、その音声を自分で発音するための運動機能に関わる感覚を同時に働かせてモニタリングしているのではないだろうか。この仮説の当否の検証には認知科学的な実証が必要だが、仮に正しいとすると、いったん発音・聞き取りのための「母語の色眼鏡」を獲得した成人に、「聞こえた通りに発音しなさい」と指導することは効果がないことになる。聴覚に与えられた刺激に対応し、学習者が「(こうやると発音できる) あの音だな」と推測しながらモニタリングするために必要な構音のための運動感覚が身につけていないためである。従って「自分で発音できない言語音は聞き分けられない」という逆説的な予測が成り立つことになる。

5.2 外国語学習への応用

外国語学習のためには、その目標言語固有の色眼鏡が習得できることが理想であるが、一度獲得された「母語の色眼鏡」は、自分の意志で自由に掛けたり外したりできないため、外国語学習上の負の干渉を生じることになる。

そこで目標言語の学習の準備段階として、まずは学習者の母語に存在する「異音」のうち、出現環境により条件付けられた条件異音の音声的特徴を意識的に内省しながら発音させるトレーニングを行う

⁹ 母語の書き言葉学習の場合ではあるが、英語母語話者のための英語綴り字教育の一種である *phonics* は音節構造ごとの綴りの学習法と考えられるが、一定の有効性を持っていることが知られている。

ことが考えられよう。こうして異音の発音と聞き取りについての自覚を促すことで、目標言語学習への負の干渉を軽減することができるのではないかと期待される。

例えば、日本語母語話者がタイ語やカンボジア語を学ぶ場合、有気音と無気音の対立の発音と聞き取りが最初の関門の一つとなる。既に2.1節で見たように、表1-1の日本語の音節初頭子音 /p, t, k/ のスロットには、有気破裂音 [ph, th, kh] とともに、それぞれに対応する無気破裂音 [p, t, k] がともに挙げられている。この有気音・無気音は音韻対立を持たない条件異音で、このうち有気音は語頭に、無気音はそれ以外の母音間や促音「っ」、撥音「ン」に現れる。このように両者のどちらが用いられるかは出現環境に条件付けられている同一音素だが、日本語母語話者は発音・聞き取りの際に、両者を音声レベルでは無意識に使い分けているのである。この無意識の有気音、無気音の異音の違いをトレーニングで自覚させることで、タイ語やカンボジア語の学習を効果的に行うことができると期待されよう。

5.3 音声音韻プロファイルの外国語教育への応用

5.3.1 日本語の音声音韻プロファイル

以下では、第2節、第3節で見た三言語の音素目録と異音の知見を、外国語としての日本語教育に応用することを考えてみよう。

日本語の音素目録(表1-1, 表3-1)については次のような点が指摘できる。

- (1) 子音のうち、破裂音が有声、無声の二項対立を持つこと、母音が五母音の対立を持つことは、世界の諸言語にもよく見られる一般的な特徴であり、その意味で日本語音声の発音・聞き取りは特別な困難は予測されない。
- (2) 表1-1の音素と異音の分布を見るかぎり、異音が複数存在するのは、五十音図で言うパ行 /p/ [ph, p], タ行 /t/ [th, t, tʃ, ts], カ行 /k/ [kh, k], ガ行 /g/ [g, ŋ, γ], サ行 /s/ [s, ʃ], ハ行 /h/ [h, ç, φ], ザ行(ダ行) /z/ [z, dʒ, dz], ラ行 /r/ [r, r̄, l, d] である。このうちラ行の異音は個人的変異あるいは自由変異であり、どの異音で発音しても問題は生じないが、それ以外は語頭とそれ以外における条件異音(例外的にガ行の場合は、語頭で [g], それ以外の環境で [ŋ] または [γ] だが、後二者は自由変異)である。条件異音は発音・聞き取りの際に(無意識のレベルではあるが)区別することが必要である。
- (3) 音韻解釈上、問題とされる点は、サ行の「シ」、タ行の「チ」、「ツ」、ハ行の「ヒ」の解釈、およびザ行、ダ行にまたがる四つ仮名「ジ・ヂ・ズ・ヅ」の異同の解釈に関わる部分である。これらは口蓋化あるいは史的音韻変化の結果として生じた体系上の不均衡が認められる部分でもある。

さらに語頭子音連続 C₁-C₂ については、C₂として現れるのは /y/ の拗音のみであることが指摘できる。また五十音図においても、ヤ行の /y/ は、/ya/, /yu/, /yo/ として現れるが、/yi/ あるいは /ye/ は存在しない。同様に、ワ行の /w/ は /wa/ として現れるが、/wi, wu, we, wo/ は存在しない。

音声と音素の分析とそれらの分布からなる言語ごとの特徴を、その言語の「音声音韻プロファイル」と呼ぶことにする。上記は日本語の音声音韻プロファイルである。

5.3.2 タイ語母語話者への日本語音声音韻プロファイルの応用例

外国語学習においては、母語と目標言語の音声音韻プロファイルを比較することにより、発音・聞き取りに関わる潜在的な困難点が予測できると期待される。当然ながら、両者のプロファイルの相違点が多く、違いが大きい場合、目標言語の発音・聞き取りを学ぶ際に負の干渉が生じやすいと推測される。

タイ語とカンボジア語の音声音韻プロファイルには類似点が多いので、以下ではタイ語母語話者に対する日本語教育を例に考えてみよう。

表 1-2 「タイ語の音節初頭子音とその音声的実現形」によれば、無声有気破裂音という特徴を持つ音素 /ch/ には [tʰ] と [ʃ] という異音がある。これは自由変異であり、対立する音素として意識されないため、タイ語母語話者にとって、「ウチ」(家)と「ウシ」(牛)との聞き分けは困難であろうと予測できる。また、タイ語には無声無気破裂音 /c/ [tʃ] はあるが、日本語の「ジ」に相当する有声破裂音 /j/ [dʒ] が存在しないため、「チ」と「ジ」の聞き分けも困難であろうと予測できる。タイ語母語話者が「ジム、事務、ジーンズ」といった破擦音「ジ」 [dʒi] で始まる単語を発音する際には、硬口蓋接近音 [ji] あるいは有声硬口蓋摩擦音 [ʃi] で代用することが多いようである。

日本語の拗音は、音節初頭子音連続 C₁-C₂ の C₂ に /y/ を持つが、タイ語には C₂ として、/r, l, v/ のいずれか一つしか現れないため、拗音の発音には問題が生じる。タイ語母語話者は「キャ、キュ、キョ」を /khia/ [khiə], /khiv/ [khiu], /khiaʋ/ [khiəʋ] のように、二重母音および見かけの二重母音、三重母音でそれぞれ代用する傾向がある。

また、これはタイ語母語話者に限らないが、撥音 /N/ の異音のうち、鼻母音 [i, ũ] はタイ語に存在しない音であるため、習得が難しく、[n] で代用されがちである。

もちろん、発音・聞き取りには学習者個人の属性による得意、不得意の差もあるが、特に発音は学習が進んでから改めて矯正することが難しい。初期学習の段階の母語話者にありがちな発音の傾向を、日本語教師が理解しておくことは、母語別の教材作成の工夫などの指導上有用なことであろう。

5.4 日本語母語話者へのタイ語あるいはカンボジア語教育への応用実践例

タイ語あるいはカンボジア語を学ぶ日本語母語話者の初学者に対する発音指導を例に、有気音、無気音の指導法の一例を挙げる。

第 2.1 節の音節初頭子音の比較で見たように、日本語の語頭の破裂音は無声、有声の二項対立であるのに対し、タイ語、カンボジア語は、無声無気、無声有気、有声の三項対立である。日本語母語話者は、無気音と有気音の対立の発音・聞き取りを習得しなければならない。有気音はほぼ問題ないが、無気音の発音の方に困難が生じる傾向がある。

既に述べたように、日本語母語話者は破裂音の有気、無気の違いを無意識に区別している（そうでなければ日本語らしい発音にならない）のだが、音韻対立のレベルではこの特徴を無視するように習慣づけられている。そこで、促音「ッ」撥音「ン」を含まない語と含む語とを発音しながら内省を働かせて自身の発音の違いを意識化するのである。例えば単独で（つまり語頭と類似の環境で）「パ」 [pha], 「タ」 [tha], 「カ」と発音する場合と「カッパ」 [khap-pa], 「カッタ」 [khat-ta] 「カッカ」 [khak-ka], あるいは「オンパ」 [om-pa], 「アンタ」 [an-ta], 「アンカ」 [aŋ-ka] を発音する場合の最後の音節を学習者自身が発音して比べることで、学習者自身が無気音を無意識に発音していることの自覚を促すのである。繰り返すが、自分で発音できない音声は聞き取れないが、発音ができるようになると、聞き取れるようになるのである。筆者のタイ語・カンボジア語教育の経験は浅く、語学教育の専門家であればもっと効果的な教育法を工夫しているであろうが、この方法は効果が高い¹⁰。

一方、学習初期の段階で、無気音と有気音の対立を有声音と無声音の対立で代用してしまった結果、

¹⁰ 同様に、英語母語話者に対しては、kill-skill, pie-spy, take-stake のような、語頭子音 C₁ と子音連続の C₂ を比べて発音させることで、無気、有気の対立の自覚を促すことも効果的である。なお、無気音の発音訓練として「ティッシュペーパーを口のまえにかざして「パ」と発音し、ティッシュが動かないように」という説明があるが、同じ方法で「ポ」と発音すれば無気音でもティッシュが動いてしまうし、発音が小さくなりがちになる欠点もある。

例えば /kɛɛŋ/ (カレー) を「ゲーン」のように発音してしまう学習者もある。/k/ 系列は /g/ が存在しない二項対立なので支障はないが、/p/, /t/ 系列はそれぞれ /p/-/ph/-/b/, /t/-/th/-/d/ の三項対立であるため、/p/-/ph/ や /t/-/th/ の対立の習得に問題が生じる。学習初期段階で修正すべき点である。

5.3.1 節で述べたように、日本語のヤ行の /y/ には、/yi, ye/ という結びつきが存在しない。同様に、ワ行の /w/ には /wi, wu, we, wo/ という結びつきが存在しない。従って日本語母語話者のタイ語の発音では、/ji, je/ あるいは /vi, vu, ve, vo/ の音節初頭音 /j/ [j] あるいは /v/ [w] の発音が弱くなる傾向がある。

6 まとめと考察

本稿では、日本語、タイ語、カンボジア語の音節の構造と子音・母音の音素目録および子音連続、二重母音、韻母などの音素配列上の特徴および音声的实现形を比較し、それをもとに作成した学習者の母語別の言語プロファイルを外国語教育に活用できないかを考察した。音韻比較については第4節にまとめたが、重要な点は、音素目録に現れる音素の対立だけでなく、音素が音声として実現する際の異音、特に出現環境に条件付けられた異音の音声的实现にも留意する点である。本稿の考察は音節を構成する要素のレベルまでに限られており、母音の長短やアクセントと声調との違いといった問題を扱うことができなかった。特に長短の音韻的な対立は音節の持続時間だけでなく、ピッチの高低、母音の連結 (hiatus) の解釈などが関連する複雑な問題であり、日本語学習上も重要な問題であるが、本稿では触れる余裕がなかった。

本稿では、音素目録、音素配列の特徴、異音をまとめたものを、当該言語の「音声音韻プロファイル」と呼んだ。このプロファイルは外国語学習における学習者の属性の一部と見なすことができる。母語と目標言語の音声音韻プロファイルを比べることで、特に初期学習での発音・聞き取りの潜在的な問題点を予測することが可能である。学習者母語別のプロファイルを用意し、母語と目標言語を比較することで、これまで外国語教育の現場で蓄積されてきた発音教育上のノウハウに理論的な裏付けを与え、学習を効果的に行うことができよう。

外国語教育あるいは言語教育一般においては、学習者個人の属性として、言語適性、性格、学習目的といったものが挙げられる。学習者の持つ母語に関する知識は学習者の属性の一つであり、漢字圏、非漢字圏といった学習者の持つ文化的背景と同様に重要であるが、これらは個人の属性ではなく、母語や社会文化環境を共有する集団のもつ属性である。その意味で、音声識別能力は、発音・聞き取りが上手というような個人的な特性というよりは、一定の言語文化集団の持つ「母語の色眼鏡」の特性であるため、プロファイリングの対象となりうる。

一般に、学習者の母語に関する知識は無意識的なもので、特に発音・聞き取りに関する知識は自覚することが難しい。母語別の音声音韻プロファイルは、無自覚の知識を意識化するための教育法の開発に役立つものである。

語学教育 (あるいは教育一般、身体的なトレーニングも含め) においては学習者のプロファイルを作成し、それをもとに個々の学習者に最適化されたきめ細かい教育法、教材を準備することで、学習を効果的に行うために役立つと期待されよう。日本語を学ぶ目的、来日の目的が多様化する近年においては、多様な学習者集団の特性を理解し、それぞれの集団あるいは個人のためのきめの細かい指導方法を開発していくことが理想であるし、一方的な教育に終わらず、お互いを尊重し、よりよく理解することに繋がると期待されよう。

母語話者の「色眼鏡」の分析とは、ある環境における要素の抽出、および要素どうしの関係の記述、要素と環境との関係に基づく異音の記述を行うことと一般化できる。この方法は構造主義言語学以来のオーソドックスな言語分析法によるものであり、同様の方法論による対照研究は、形態論、統語論、意味論といった言語研究に留まらず、構造主義人類学で実践されたように異文化の分析と理解についても、一定程度応用が可能であることを附言しておきたい。

峰岸 真琴 (MINEGISHI Makoto)

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所

【謝辞】本稿は本研究は JSPS 科研費 JP20K00600, JP19K00598 の助成を受けたものである。

執筆の過程で、匿名の査読者に音韻解釈の問題に関する有益なご助言をいただいたことに感謝の意を表したい。論考になお不備が残るとすれば、すべて筆者が責任を負うものである。

参考文献

- 上野善道 (2003) 「アクセントの仕組みと体系」 上野 (編) pp.61-84.
 上野善道 (編) (2003) 『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』 朝倉書店.
 大野晋, 柴田武 (編) (1977) 『岩波講座日本語 5 音韻』 岩波書店.
 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一 (編著) (1988) 『言語学大辞典 第1巻 世界言語編 (上)』 三省堂.
 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一 (編著) (1989) 『言語学大辞典 第2巻 世界言語編 (中)』 三省堂.
 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一 (編著) (1995) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』 三省堂.
 坂本 恭章 (1969) 「標準カンボジア語の音韻体系」 『アジア・アフリカ言語文化研究』 2号, pp.88-99.
 坂本 恭章 (2001) 『カンボジア語辞典』 アジア・アフリカ言語文化研究所.
 坂本恭章, 峰岸真琴 (1988) 「クメール語」 亀井 他 (編著) pp. 1479-1505.
 城生佰太郎 (1977) 「現代日本語の音韻」, 大野晋, 柴田武 (編) pp. 107-145.
 日本語学会 (編) (2018) 『日本語学大辞典』, 東京堂出版.
 橋本萬太郎 (1977) 「音韻の体系と構造」, 大野晋, 柴田武 (編) pp. 1-29.
 服部四郎 (1960) 『言語学の方法』 岩波書店.
 服部四郎 (1979) 『音韻論と正書法』 大修館書店.
 三谷恭之 (1989) 「タイ語」 亀井 他 (編著) , pp. 529-545.
 峰岸真琴 (1985) 「現代クメール語の正書法と諸方言」, 『言語研究』 第88号, pp.41-67.
 峰岸真琴 (1990) 「タイ語と日本語」, 『講座日本語と日本語教育 第12巻 言語学要説 (下)』, pp.285-303, 明治書院.

